

| | |
|------|------------------------|
| タイトル | 御家人と昌平坂学問所・学問吟味 |
| 著者 | 石井，耕 |
| 引用 | 北海学園大学学園論集，140：157-176 |
| 発行日 | 2009-06-25 |

御家人と昌平坂学問所・学問吟味

石 井 耕

第1節 はじめに

寛政改革以降の江戸幕府の能力主義人事登用制度については、笠谷(1993, 2005)、橋本(1993)、辻本(1988, 1990, 2002)などをふまえて、石井(2009)で問題提起を行った。根幹は、学校の制度化(昌平坂学問所の官学校化)、試験の制度化(学問吟味)、登用(採用)の制度化(「番入り」と、それらの一連の過程の連続化にある。いずれも明治以降には広範囲に社会の構造となったことであるが、その先駆的なものとして、江戸幕府がこれらをすでにおよそ70年間の長い期間、実施していたことを、先行研究から教えられた。もちろん、四民平等以前の身分制の枠組みの中で行われたことであり、現在の能力主義人事制度とは違う。大前提は、対象が幕臣である、ということであり、幕臣以外は対象ではない。しかしながら、養子制、御家人株の売買による幕臣への参入可能性ということも含めると、参入障壁の強固すぎる身分制ではなかったのである。また、足高制によって、幕臣の中でも能力の高いものを、処遇していく制度も実施されていた(笠谷(1993))。

江戸幕府の能力主義人事登用制度についての、より詳細な事実の確認は後述するが、前著(石井(2009))で問題提起し、残された課題であった論点をもう一度確認しておこう。

登用の制度化については、享保9年から、惣領登用制度が行われた。これは旗本の惣領のうち、優秀な者を、当主の在職中に登用することで、これを「番入り」という。対象は旗本の惣領であり、惣領以外の子弟および御家人は対象ではない。この番入りの制度と並行して、寛政以降、昌平坂学問所の官学校化、学問吟味の実施が行われ、学問吟味の甲科・乙科及第の旗本惣領の番入りが行われたのである(橋本(1993))。

それでは、旗本のうち惣領以外の子弟、御家人はどうしたのであろうか。登用の可能性がない場合、惣領以外の子弟、御家人に学問吟味を目指すモチベーションはあったのだろうか。本稿は、この論点を手がかりに、江戸時代の能力主義人事登用制度の内容と影響について検討していきたい。といっても、この論点については、先行研究もほとんどないし、文献も見付けられない。十分に資料を確認できていない状況であるので、あくまで研究ノートの段階であることを御断りしておきたい。

本稿は、寛政から享和・文化までの学問吟味の及第者について、おおむね文政から天保14(1843)年までの時期を対象とする。弘化元(1844)年以降の幕末期については、先行研究において、幕府の能力主義人事登用制度は確立したとみられている。なお、本稿における学問吟味の及第者の名簿は、「昌平学科名録」(大久保(1980))に依拠している。ただ、他の資料と照らし合わせて、誤字と見られるところは訂正している。(宮崎成身の『視聴草』十集之四に、「昌平学館登第名簿」があり、これには、丙科及第(御褒詞)まで掲載されている。丙科及第の場合、後の再受験者がある。なお、天保4年までの掲載である。また、甲府勤番における学問吟味の結果も含む。昌平学科名録と僅かながら違いがある。)

第2節 旗本の登用

1 番入り

弘化以降の幕末期になると幕府の能力主義人事登用制度は確立したとみられているが、それではどのようにして成立し、定着していったのであろうか。先行研究から、要点をまとめてみよう。

まず、昌平坂学問所が幕臣養成機関へと位置づけられていく経緯に簡易に触れておきたい。

天明8(1788)年 柴野栗山、儒者として招聘。

寛政元(1789)年 幕臣岡田寒泉、儒者として登用。

寛政2(1790)年 寛政異学の禁 松平定信の寛政の改革の時期。

寛政3(1791)年 尾藤二洲、儒者として招聘。

寛政4(1792)年 昌平校を造営、講義を開始。

寛政5(1793)年 林述斎、大学頭となる。

寛政6(1794)年 第二回学問吟味(実質的な開始)。

寛政8(1796)年 古賀精里、儒者として招聘。

寛政9(1797)年 昌平坂学問所を官学校とする。第三回学問吟味。

「番入り」とは、何か。以下、橋本(1993)に従って、整理しておきたい。寛政の改革によって、学問吟味が始まったわけだが、学問吟味の及第は自動的に幕臣への登用につながるものではなかった。ただし、学問吟味とは別の制度に則って、実質的に及第者の登用が行われた。それが、学問吟味に及第した旗本惣領(嗣子)の「番入り」である。そもそも当主の及第者は既に登用されているのでこの制度の対象ではない。

江戸中後期には、旗本は5200人、御家人は1万7000-1万8000人がいたと推定される。その旗本のうち番方34%、役方25%であり、他は小普請支配34%など無役であった。職が限られており、能力があっても、なかなか登用されないという状況だったのである。そこで、享保9年から、惣領登用制度が行われた。これは旗本の惣領のうち、優秀な者を、当主の在職中に登用することで、これを「番入り」という。その判断基準は、本人の平素の行い、武芸、学問、父の永年勤続、さらには縁故もあった。

寛政元（1789）年松平定信の達によって、番入り選考を励行することとなったことをふまえ、寛政3年から、学問出精ということで、番入りする者が出てきている。橋本（1993）によれば、学問出精での番入りは、寛政3年9名、寛政6年3名、寛政11年11名である。これらは、学問吟味を及第したものとは限らない。

次いで、橋本（1993）が「番入り」の分析対象とした、寛政6年・寛政9年・寛政12年・享和3年・文化3年の5回（第二回―第六回）の学問吟味で集計する。この5回で、総及第者は、御目見以上（旗本）・甲科は16名、以上・乙科は67名、御目見以下（御家人）・甲科は6名、以下・乙科は40名である。あわせて、以上83名、以下46名、総計129名であった。

そして、橋本が集計しているように、第二回学問吟味の実施された寛政6年以降及第した旗本惣領の多くが、番入りすることとなった。ただし、どこへ番入りするかは、家筋相応の番組への登用であり、橋本は「当時の身分制度の原則の枠内での業績主義的登用制度」としている。橋本（1993）の集計（141―142頁）では、番入りした者は、次のようになっている。

第二回（寛政6年） 甲科1名、乙科2名

第三回（寛政9年） 甲科0名、乙科8名

第四回（寛政12年） 甲科1名、乙科5名

第五回（享和3年） 甲科2名、乙科4名（依田恵三郎を含めれば甲科3名と思われる）

第六回（文化3年） 甲科1名、乙科5名（大島九郎太郎を含めれば乙科6名と思われる）

計 甲科5名、乙科24名（甲科6名、乙科25名と思われる）

番入りしていることが未確認の者は、寛政9年乙科2名、寛政12年乙科1名、享和3年乙科1名、文化3年甲科1名の5名である。

2 第二回と以降の違い

当初の学問吟味の受験者は、昌平坂学問所での教育を受けて、学問吟味を受験したわけでは必ずしもない。熊倉（1976）は、「武士を吏僚としての能力を持つ知識人に限定して人材を開発することではなかったか。ここに異学の禁のなかにもりこまれた人材登用策の意義があった」として、学問吟味の発足経緯を分析する。

第一回の不首尾の後、林家には述斎が養子に入り、寛政6年の第二回学問吟味が行われた。この時、熊倉の分析によって御目見以上での及第者の年齢を見ると、甲科遠山金四郎景晋（44歳）、奈佐久左衛門（50歳）、乙科松平内蔵助（42歳）、人見又兵衛（40歳）、高林弥蔵（40歳）、惣領、及第後寛政6年5月「学問出精」で両番へ）、滝川小右衛門（年齢不明だが、宝暦8（1758）年家督を継いでおり、現職代官）といずれも高齢であった。高林弥蔵以外は当主である。若年であったのは、後に儒者見習となる山上藤一郎（甲科、23歳）と宮崎平四郎（乙科、23歳、宮崎成身の父）であった（いずれも惣領であり、後に番入りしている。また、平賀新五郎は不明だが、現職の長崎奉行の伯父であり、決して若くはないと思われる）。

御家人については、大田直次郎(南畝・蜀山人)が第二回学問吟味の記録を残している(元は「科場窓稿」,玉林(1944)も参照)。神尾市左衛門組御徒から大田直次郎(甲科及第),井上作左衛門,鈴木文五郎,中神順次(この3名は乙科及第),中神悌三郎(寛政9年乙科及第の中神悌一郎と同一人物ではないかと考えられる)の5名が受験した。この年,直次郎は46歳である。初場が2月3日であり,第二回は2月22日に行われた。「詩経を持って,鈴木文五郎と新楽郷右衛門(瀬名伝右衛門組御徒,寛政6年乙科及第)を誘って,——合計33人であった。」第三回は2月24日に行われた。この時は,「以上16人,同部屋住5人,以下19人,同部屋住5人の合計45人で,4人が病欠欠席し,出席した者は41人であった。」第四回は,2月27日で,「以上11人,以下13人」であった。第五回は2月28日で,受験者は23人であった。3月14日林述齋と面談し,4月22日に呼び出され褒賞を受けた。御目見以上の者は,3月晦日であった。この後,大田直次郎は,寛政8年,支配勘定を命ぜられ,70俵5人扶持に,足高の30俵が加わった。

このように,及第者に40代の者が多かったということから,第二回の学問吟味は,幕臣全体の中から,有為の人物を「吏僚として」選抜するという意味があったと考えられる。逆にいえば,寛政4年に「三博士」による講義が始まったとはいえ,まだ日が浅く,そこから多くの学問吟味の及第者を出すには至っていなかったということである。

一方,林家の門人記録である「升堂記」を見ると,山上藤一郎は,寛政元年林信敬の時期に,御徒目付熊太郎の子として,安原三吾の「口入」で「升堂(入門)」している。他には,鈴木才兵衛(以上,寛政9年甲科及第,寛政3年升堂),宮重八十之助(以上,寛政9年乙科及第,寛政5年升堂),志村又左衛門(以上,寛政12年甲科及第,寛政5年升堂),井戸信八郎(以上,寛政12年乙科及第,寛政4年升堂),江原馬之助(以上,文化3年乙科及第,寛政5年升堂),小林鉄之助(以下,文化3年乙科及第,寛政11年升堂),大河内彦四郎(以上,文化3年乙科及第,享和3年升堂)の7名が,林家の塾で教育を受けて,学問吟味に及第となっている。そもそも,この人数は,この時期の及第者数からみて,ごく一部といえるだろう。また,升堂の時期も,小林鉄之助,大河内彦四郎を除いて,寛政5年までに限られ,それ以降,林家から学問所に教育の場が移ったことは明らかである。

なお,大斧幸之丞(以下,寛政6年乙科及第,寛政7年升堂),饗庭仙太郎(以下,寛政12年乙科及第,寛政11年升堂),山本忠兵衛(以上,寛政9年乙科及第,寛政9年升堂),渋江久太郎(以上,文化3年乙科及第,文化5年升堂),平岩七之丞(以上,文政6年乙科及第,文政6年升堂),杉原平吉(以上,文政11年乙科及第,文政11年升堂,のち儒者)も升堂しているが,及第後の升堂であり,学問吟味を目指したわけではない(饗庭は1年前)。いうならば,研究生としての立場であったとみられる。ただし,改名・養子などで,他にも該当者がいた可能性はある。また,そもそも升堂記に登場する林家門人は,大名をはじめ各藩の藩士,浪人などが多く,幕臣はそれほど多くない。石川謙(1960)の集計では,「第四期(寛政5年—天保9年)の林述齋の時期の入門者数796名のうち,旗本・御家人128名,その家臣24名,その他47名」であった。

石川忠久（1998）も述べているように、「昌平坂学問所の書生寮（各藩の藩士が学んだ）の名簿『書生寮姓名簿』はあるのに、幕府の直臣の入寮した寄宿寮の姓名簿はない」ので、昌平坂学問所で誰が学んだのかわからないのである。「幕臣で学籍をおいて学習する者は「稽古人」と呼ばれた。（橋本（1993））」これには「寄宿稽古人」と「通稽古人」の二種類があった。寄宿稽古人は、定員30名（うち20名を御目見以上（旗本）、10名を以下（御家人）から。天保年間に48名に増員）、在籍期間1年であった（延長も認められた）。「幕臣の当主は、勤務があるため、原則として寄宿は認められなかった。」「通稽古人は、通学によって学ぶ稽古人で、定員や年限はなかった。」「寄合（3千石以上）は、予備役として、日頃から自己研鑽を積むのが仕事であったが、学問所では、北寮を寄合衆の通う学習の場所に充てていた。」

稽古人や寄合は、儒者の記録した「昌平坂学問所日記」に僅かに登場してくる人名程度の記録しか残されていない。橋本（1998, 2002, 2006）の解説・編集した日記は、寛政12年（1800年、ただし4月から）・享和元年（1801年、ただし9月まで）から、幕末まで断続的に残されている。

例えば、当面検討対象となる寛政12年の日記の記事には、閏4月16日に、松平喜太郎（以上、寛政12年甲科及第、寛政6年も受験）・葉山金次郎（以上、享和3年乙科及第）などが出てくる。松平喜太郎は及第したばかりであり、その後も学問所の書物取調方をしていたのである。松平喜太郎は、8月22日に「系譜調」（寛政重修諸家譜）を命じられ、「退塾」することを届け出ている。同じ8月13日には、後に儒者となる依田恵三郎（以上、享和3年甲科及第）から寄宿願が出ている。

また、「日本教育史資料七巻」にも、僅かに昌平坂学問所で学んだ人名が登場する。例えば、寛政12年閏4月20日、稲葉主税組御徒中神悌三郎（寛政9年乙科及第）が出役を命じられ、享和3年11月5日出役御免となっている。また、文化2年閏8月13日、御作事下奉行鈴木八兵衛倅鈴木榮蔵（享和3年乙科及第）が、出役5人扶持を命じられている。文化5年9月23日父が御目見以上となり、10人扶持となった。文政12年榮蔵が小十人組に番入りし、7月9日出役御免となっている。

3 学問所での教育から学問吟味へ

寛政9年の第三回学問吟味に話を戻そう。この時の御目見以上の及第者は、甲科2名、乙科17名である。このうち、惣領・養子が10名で、橋本の分析では、このうち8名が番入りしている。寛政12年の第四回学問吟味では、以上での及第者は、甲科2名、乙科18名である。このうち、惣領・養子が7名であり、橋本の分析では、このうち6名が番入りしている（含む夏目長右衛門）。これらが、昌平坂学問所で教育を受けて学問吟味を受けた最も初期の面々である可能性が高い。

さらに、及第者のうち、寛政9年の寄合1名（甲科）、寛政12年の寄合2名（乙科）、小普請6名（乙科）も昌平坂学問所出身ではないだろうか。寄合（3千石以上）・小普請は無役で、学習時間を得る可能性が高かったからである。また、寛政9年の及第者のうち、勝安兵衛（以上、後桓

兵衛、新御番、乙科及第)と中山長之允(以上、右筆、乙科及第)は、寛政6年の丙科及第であり、現職を持ちながら再受験し、乙科及第となった(宮崎「視聴草」)。寛政12年の間宮平蔵(以上、御書院番、乙科及第)も同様である。こうして見ていくと、旗本当主で、初受験と推測される者で及第したものは、寛政9年3名(江口長七郎(御書院番)、山本忠兵衛(新御番)、朝比奈伝吉(大御番)、いずれも乙科及第)、寛政12年1名(鈴木勝次郎(小十人)、乙科及第)だけではないか、と推測できよう(再受験の可能性はある)。

御目見以下(御家人)から及第した者(この両年はいずれも乙科及第)も、倅、弟、小普請が多い。それ以外は、寛政9年前述した再受験の中神悌三郎(御徒)、大田直次郎の甥吉見儀助(小普請世話役)、望月文之助(御徒)の3名、寛政12年は前述した饗庭仙太郎(与力)、松本直右衛門(御徒)、柳権十郎(手伝)の3名である。

状況証拠であるが、寛政9年、寛政12年の第三回・第四回学問吟味は、昌平坂学問所での教育を経て、実施されたものであるといえよう。寛政6年の第二回とは異なるのである。教育機関での能力開発と公式試験での能力評価、そして旗本惣領の「番入り」という人材登用が、一つの道筋としてつながったのである。幕府の、またその一部であるが、能力主義人材登用制度の確立として挙げることができるのではないだろうか。石川謙(1977)も「学問所の近代学校的な性格の一端は、寛政12(1800)年の昔において芽生えたものといえる。」と述べている。

さらに、橋本(1993)の指摘するように、文化3年から文政元年の12年間の「中断以前では、(及第者に)当主層が多いのに対して、中断以後になると嗣子が最多数層となったほか、次男三男等の嗣子以外の子弟の及第が目立って増加している。」すなわち、文政以降では、学問所での教育から学問吟味受験という過程がより明確化するのである。

4 「厄介」について

最初の5回(寛政から文化)の学問吟味及第者のうち、旗本当主および惣領・嗣子でないもの(6名)及び御家人(46名)は、総計129名のうち52名である。以下、この52名を考察の対象とする。

まず、旗本のうち惣領以外の子弟はどうして学問に励んだのであろうか。「番入り」という登用の可能性がない場合、惣領以外の子弟に学問吟味を目指すモチベーションはあったのだろうか。

該当する旗本は6名であり、伯父・又甥・弟である。旗本の惣領以外の子弟については、橋本(2005)が分析している。「武士階級の中でも彼らこそが学習経歴のもたらす恩恵を最も感じることが多い存在」「彼らは近世の武家の家族にあつては「厄介」とも呼ばれる存在で、嫡男に障りが起きない限り家を相続できる見込みはなかった。」「しかし、彼ら次男三男等も、大きな功績をたてたり力量を示したりすることで別家を建てることを許されるか、血統や資質を買われて養子となって他家を相続することによって、社会的・経済的に独立を遂げることができた。次男三男等にとって他家への養子縁組が望ましいキャリアだったとすれば、彼らは養家に望まれるように

自己の価値を高め、それを示す努力をしたと考えられる。その際に、幕府の用意したおおよけの試験制度や学習階梯において一定の業績をあげることが、彼らにとってはなんらかの意味があったのではないか。」

事実、学問吟味及第の者の中には、養子が数多い。寛政9年では、旗本の坂部弥太郎、筒井善三郎、間宮恒五郎、田丸新左衛門、大沢定之丞（番入り未確認）が挙げられる。続いて、寛政12年鶴殿鉄三郎、夏目長右衛門、享和3年長田求馬（甲科）、石川五郎助、金田政五郎（番入り未確認）、文化3年太田友三郎（甲科）、安藤左京、山岡宇之助、山本権十郎、大原富之丞である。計15名である。御家人では、寛政6年の内藤弥蔵、文化3年の植木八三郎が、及第時点で養子である。

さらに、明記されていないが、及第時点で、すでに当主となっている者のなかにも養子はいる。例えば、寛政6年甲科及第の遠山金四郎景晋（著名な町奉行遠山金四郎景元の実父である）も永井直令の四男からの養子である。景晋は長崎奉行・勘定奉行などを歴任し、多くの業績を残している（藤田（1992））。また、享和3年甲科及第の筒井政憲も久世広景の子であり、筒井家に養子で入った。長崎奉行・町奉行を歴任し、阿部正弘の外交顧問的役割に任じ、ロシアのプチャーチン応接掛として交渉に当たった。学問所でも重要な役割を果たしている。遠山景晋と筒井政憲は、寛政一文化の時期の学問吟味及第の旗本の中でも、傑出した存在である。

これらの全てが、学問の能力によって養子になったとはいえないが、学問吟味及第以前にその潜在能力を評価されて、養子として迎え入れられた可能性も十分に考えられる。

学問吟味及第の時点で、「厄介」であった前述の6名については、その後養子となったかどうか詳しいことはわからない。「江戸幕臣人名事典」では、宮重八十之助（寛政9年乙科及第）の孫信次郎が出ている。また、伊丹左兵衛（享和3（1803）年乙科及第）と同一名の人物が出ているが、年代から見て、疑問がある（資料は幕末慶應のものである）。

その中で興味深いのは、寛政9年乙科及第の青木郷助安貞である。御書院西丸番村井十次郎實方又甥となっているこの人物は、天明8（1788）年遠島となっている。「続徳川実紀」天明8年9月に、「代官青木楠五郎紀明罪ありて遠流に處せられしかば。その子亀之助（のちの郷助）は中追放命ぜられ。幼稚なるをもて親族に預けおかれしが。こたび遠流の父楠五郎に随従しその島に赴き。孝養ありたしと申し出しにより裁判あり。— 聴して可なり。— 後々出島もまた心のままたるべしとなりとありて」と記されている。孝養、先例、罰などを多方面から検討されている。

そして、「続徳川実紀」寛政10年5月に、「元代官青木楠五郎紀明子郷助安貞。父に添て遠き島にて介抱とどきしをもて追放をゆるさる。のち母につかえて一方ならず孝養の聞へ有しをもて。こたびめし出されて禄百俵を賜ひ小普請に入らる。」と記されている。武鑑では、及第後の寛政10（1798）年再召出となり、表右筆として禄高100俵を賜った（その時点で23歳である）。文化11年奥右筆。

第3節 御家人の及第後の経歴

1 軽輩の励み

寛政一文化の5回の学問吟味に及第した御家人は計46名(甲科6名,乙科40名)である。彼らはどのようなモチベーションをもって、昌平坂学問所で学び、学問吟味を受験したのであろうか。御家人には旗本の「番入り」に当たる制度は確認されていない。そこで、学問吟味に及第した御家人が、その後どのような経歴をたどったかについて、資料を調査し検証してみた。

そのうち子弟は、忝(御家人は惣領とは表記していない。)12名、養子2名、弟2名である。他の30名は、すでに当主であって、御徒・与力・同心などである。坊主の文宅(「科場窓稿」では梶田文宅)、御賄六尺の清助の二人は姓もない。幕臣といっても、かなり広い層が、学問吟味の受験者の対象となっていたことがわかる。

橋本(1993)は、「御家人階層については、旗本階層における番入り選考に相当する制度もなく、学問吟味及第者の優先的登用などの慣行が確立されていなかったため、学問吟味及第と登用や昇進との関連を表す史料は多くはみあたらない。それでも、旗本階層における及第者優遇の慣行を反映して、及第者の登用を働きかける行為はあったようである」としている。その中で、「軽輩一般の学問修業の励み」が指摘されている。また、橋本の別稿(2004)では、「軽輩学問吟味登科一→幕吏出世型」の事例が挙げられている。

山本(2005)も、「ただし、幕府の昇進政策は、依然として家格重視であったことも事実である。学問吟味は義務ではなかったから、学問吟味を受けずに昇進するほうが主流だった。しかし、それは、学問吟味を受ける者にとっては、当然の前提であった。家格の低い者は、学問がないとスタート地点にさえ立てない。学問に励めば、番入りや昇進の可能性が開けてくる。そうすると、家格の高い者でも学問に無関心ではいられなくなる。こうして学問は、武士にとって避けては通れないものになった。」と述べている。

やや時代は下るが、磯田(2002)は、幕末鳥取藩池田家を事例として、藩校教育を重視した人材登用の仕組みづくりへの試みを詳細に実証している。鳥取藩では、嘉永6(1853)年のペリー来航時における藩の軍事的対応をきっかけに、門閥世襲批判の提言が広まった。水戸藩から養子に入った藩主慶徳自身が、まったく軍事的知識のない門閥重臣が指揮権を持つ状態に大いなる危機感を持った。

人材の登用は、いかなる方法でなされるべきか。鳥取藩では、藩校の拡張がなされ、藩士全員の出席が義務づけられることから、着手された。家老から足軽までの出席を強調し、学校内では、身分よりも年次を優先することとなった。しかしながら、下級藩士は熱心に出席したものの、家老はじめ上級藩士は、出席を拒み、当初の目論見は実現しなかった。上昇志向の強い下級武士は藩校出席に熱心であったが、既得権益を持つ上級武士は、能力評価につながることを恐れ、出席を拒否した。

幕府では、旗本でも熱心に学習するものもいたが、御家人の上昇志向という点では藩と共通であったと考えられる。そのためには、学問所での学習、学問吟味の及第、登用・昇進の連続する過程が、御家人にも可能性があることを示さなければならない。「軽輩の励み」として、競争に参加するものの共通認識を形成しなければならない。

しかしながら、御家人の学問吟味を経た登用・昇進については、他に論じているものはあまりないと考えられ、また旗本に比べて御家人の経歴に関する資料も限られている。そこで、以下では、限られた資料を手がかりに、個別の御家人の経歴などの事例を検討することによって、学問吟味の及第と登用・昇進の関係について検討していきたい。^{#1}

2 勘定

もともと勘定は、文官としての能力を重視する職務であった。そのため比較的家禄の少ない旗本・御家人が能力によって登用され、昇進してきた。

「江戸幕府勘定所は、直轄領の地方官僚（郡代・代官）を指揮監督すると共に、幕府財政および農政を管掌する中枢機関となっており」（馬場（1975））、「勘定奉行およびその機構を監視し勘定所に重大な影響力を持っていた勘定吟味役」の昇進過程を中心に、在職期間、就職時年齢、家禄、職制上の特質について分析したのが馬場（1975）である。

勘定奉行への昇進者についてみると、寛政改革期から天保改革期については、「番士→（目付）→遠国などの奉行→勘定奉行」という昇進過程をたどったものが最も多く、31名（この時期の総数47名の66%）である。次いで、「（勘定組頭）→勘定吟味役→勘定奉行」の昇進過程をたどったものが8名、勘定組頭から直接勘定奉行になったものが2名である。

一方、勘定吟味役は、江戸幕府全体で138名が就任しているが、そのうち120名（87%）は「財務関係経験・勘定所属僚・代官」から勘定吟味役に就任している。寛政改革期から天保改革期に勘定吟味役に昇進した者は45名であり、そのうち37名（82%）は「財務関係経験・勘定所属僚・代官」から勘定吟味役に就任している。「すなわち、勘定吟味役に就任した者のほとんどが、その職務遂行上必要とした幕府財政一般についての知識に明るい勘定所吏僚、代官、納戸、賄方、蔵奉行などを経験した経済官僚であったことがわかる」（馬場（1975））

今回対象者には、勘定奉行や勘定吟味役まで昇進した者はいないが、勘定所において昇進したのは、次の4名である。

(1) 大田直次郎 寛政6年甲科及第 神尾市左衛門組御徒

（以下、番号は通し番号である。また、肩書きは「昌平学科名録」に基づくもので、及第時点のものである）

大田直次郎（南畝・蜀山人）は寛政6年甲科及第のただ1人の御家人であった。大田直次郎は、狂歌・洒落本・黄表紙作者として有名だが、「文壇を離脱」、及第以降は「支配勘定に昇進、幕吏

として大阪・長崎に赴任した」(『日本史辞典』)。支配勘定とは、勘定所の下級管理職であり、御目見ではない。大田直次郎については、数多くの研究がなされており、ここでは詳しくは触れない。

(2) 井上作左衛門玖 寛政6年乙科及第 大田直次郎と同じ神尾市左衛門組御徒
瓊, 碧海。

「科場窓稿」によれば、大田直次郎と一緒に吟味に行った一人である。その後同一人物という確証はないが、武鑑では、文化5年表火之番、文化11年勘定評定所留役支配勘定、文化14年勘定評定所留役(御目見以上)となっている。「続徳川実紀」天保8年12月「勘定がた井上作右衛門老免して小普請となり賞銀あり」と記されているのも同一人物ではないか。

文化2年上呈の「藩翰譜続編」の清書にも携わっている(福井(1983))。

「江戸幕臣人名事典」では、養子井上久之助の記事に、養父井上作左衛門が「御勘定相勤」となっている。なお、久之助の実父は、表右筆中山長之丞(允)(寛政9年乙科及第)である。

(3) 吉見儀助義方 寛政9年乙科及第 清水勤番支配柘植長門守組小普請世話役
大田直次郎の甥で戯名「紀定丸」。少々紀定丸、野原雲輔。宝暦10(1760)年生。

文化2年支配勘定、同勘定評定所留役介、文化5(1808)年勘定評定所留役(御目見以上)150俵高(職禄)役料20人扶持、文政4年勘定組頭永々御目見以上(62歳)、天保4年家禄30俵加増(「柳宮補任」では、天保年間に、50俵3人扶持持高加増)、天保12年御役御免、病死(82歳)。「続徳川実紀」天保12年6月に、「勘定組頭吉見儀助老免して小普請となり褒金を賜ふ」と記されている。

森銚三(1992)に「紀定丸」の稿がある。

(4) 奥山亀三郎 享和3年乙科及第 御台様御広敷添番

「江戸幕臣人名事典」によれば、奥山金之助について、「祖父奥山亀三郎死支配勘定——父奥山万三助死御勘定」と記されている。父の代に、御目見になった。

3 前幕領期の箱館(松前)奉行所

18世紀末の幕府にとって、最大の課題は異国船の到来の増加によって生じた、海防問題であった。特にロシアとの緊張関係が高まった蝦夷地が焦点となった。寛政4(1792)年ラクスマンが根室に到来し、通商を要求し、幕府はこれを拒絶した。寛政9年には、イギリス船が室蘭に到来し、文化元(1804)年ロシアのレザノフが長崎に到来し、通商を要求した。

こうした中で、それまで松前藩に任せていた蝦夷地の統治を、幕府で直轄することになっていった。寛政11(1799)年東蝦夷地を直轄領とし、享和2(1802)年蝦夷奉行(のちに箱館奉行)を

置いた。さらには、文化4（1807）年西蝦夷地も直轄領とし、箱館奉行を廃し、松前奉行を置いた。この直轄は、文政4（1821）年まで続き、そこでいったん松前氏に還付された。この間を、前幕領期という。なお、箱館開港によって、再び直轄領となった時期を、後幕領期という。前幕領期に、伊能忠敬の蝦夷地測量（寛政12年）、間宮林蔵の間宮海峡の発見（文化5年）が行われたのである。

前幕領期の重大事件が、文化3－4年（1806－1807年）に起きた、ロシアのレザノフの部下フヴォストフ、ダヴィドフによる樺太・エトロフでの侵掠行為である。この事件は、日本全国に大きな衝撃を与え、海防に関する議論が噴出する大きなきっかけとなったのである。多くの資料が残されているが、以下では、箱館奉行所の責任者の一人であった、箱館奉行羽太安芸守正養による『休明光記』と平田篤胤が関係資料を収集した『千島の白浪』をてがかりに、その当時の幕府の関係者について検討する。伊能・間宮は専門職として、大きな仕事をなしとげたわけだが、箱館奉行所の行政担当者は、厳罰に処せられた。

(5) 新楽郷右衛門（閑叟） 寛政6年乙科及第 瀬名伝右衛門組御徒^{#2}

明和元（1764）年生、文政10（1827）年歿、64歳。

定、伝蔵、間叟、愛問主人。養子金十郎は大田直次郎の娘婿の弟。（「国書人名辞典」）

閑叟はなかなか興味深い人物である。前述したように、寛政6年の学問吟味には、大田直次郎とともに受験している。

致仕後、医師として、奉行戸川安論に随行して箱館奉行所に勤務していたおり、蝦夷地を視察している。また、文化4年の事件に関する書簡が平田編「千島の白浪」に多く残されている。

書簡は、4月の児玉空々先生宛、現地に赴き事件の模様を記した6月の家人宛、それを受けた子新楽金十郎の児玉先生への写しの送付状などからなる。金十郎は大田直次郎に見せ、直次郎から勘定奉行へ提出している。

閑叟は児玉空々に従って七絃琴を学んだ。松崎慊堂の「慊堂日曆6巻」天保14年7月にも、エトロフ事件の記録である「二叟譚奇 二巻」の下巻の著者として、閑叟に触れている。「閑叟は郷右衛門と称し、幕廷徒士、中年に致仕す。学は頗る博く、また琴を善くし、心越の指法を伝う。余は杉本君忠温（樗園）・市野俊卿とみな就いて学ぶ。後に漫遊しこの役に従い、終るところを知らず。別後殆んど五十年、その記すところをこの巻に観るを得て、感愴の余に書す。」と記している。（天保2年4月にも同様の記事がある）

また、足利学校の蔵書を調査している。

(6) 児玉嘉内 寛政9年乙科及第 小普請組伊藤河内守支配

享和4（文化元）年2月蝦夷地在住、文化4年4月箱館奉行支配調役下役 火消役神保左近組同心児玉嘉内、34歳（「休明光記」など）。

文化4年当時、エトロフ島に駐在しており、後に、対応を咎められ、「おもき追放」処分を受ける。

(7) 柳権十郎 寛政12年乙科及第 勤方世話役手伝

文化14年松前奉行所調役下役元メ (80俵3人扶持, 金10両御役金)。

(8) 早川八郎 享和3年乙科及第 明屋敷番伊賀之者

文化4年箱館奉行支配下役 明屋敷伊賀者早川八郎 (「休明光記」)。

文化7年御掃除之者。文化12年表火之番 (70俵)。文政2年4月4日西丸表火の番早川八郎・同人悴雷輔二階通稽古相願 (「学問所日記」)。

4 学問所等での登用・勤務

学問所での教育を受け、学問吟味に及第した者の能力を生かす場として、学問所での勤務がある。この時期の御家人から儒者への登用例はないが、学問所事務長ともいうべき勤番組頭には御家人からの登用がある。なお、「続徳川実紀」寛政12年3月に、黒澤正助、鈴木岩次郎 (天守番) が「新置」の学問所勤番組頭を命じられている。鈴木岩次郎は、後の書物奉行であり、白藤として詩作などに活躍した人物である。また、兼務である学問所出役には多くの御家人の及第者が登用されている。

さらに、主に林述斎の管轄のもとで、この時期の幕府は多くの編纂事業を行っている。「近世後半、特に寛政期以降の時代は、あたかも「編纂書の時代」と呼んでも過言ではない程に大きな編纂物が著された時代である。」(高橋 (1989))

その中心となる組織は昌平坂学問所であり、地誌調所、沿革調所などの組織が構成された。さらに、右筆、紅葉山文庫、天文方、和学講談所などとの連携作業も多く見られる。これらの編纂物の一部には、編纂に携わった者の氏名が明記されており、その中に学問吟味及第の旗本・御家人の名を数多く見出すことができる。(福井 (1983))

(9) 中神順次守節 寛政6年乙科及第 神尾市左衛門組御徒 (大田直次郎と同じ)

明和3 (1766) 年生, 文政7 (1824) 年歿, 59歳。

君度, 梅竜園。中神守孝の子。(「国書人名辞典」)

享和3年御徒目付, 文化3年学問所勤番組頭 (御目見以上, 150俵高)。

「藩翰譜続編 (文化3年完成)」「新編武蔵風土記稿」(福井 (1983)) 編纂にも関わる。地誌に関する著作が多い。

次男順次守業が家を継ぎ、奥右筆から書物奉行を務めている。「江戸幕臣人名事典」にも同様の記述がある。

(10) 飯田直次郎 寛政6年乙科及第 進物取次番之頭 市太郎倅
「藩翰譜続編（文化3年完成）」（福井（1983））編纂に関わる。

(11) 中神悌三郎守身 寛政9年乙科及第 稻葉主税組御徒
学問所出役，「寛政重修諸家譜」編纂に参画。

文化13年本丸表火之番。文政7年3月「中神君太沖（守躬）——富士見宝蔵番」（松崎慊堂『慊堂日曆1』）。

(12) 勝田弥十郎 享和3年乙科及第 明屋敷番伊賀之者。

安永9（1780）年生，天保2（1831）年歿，52歳。

半斎，獻。荒井保之の次男，勝田広孝の養嗣。

学問所勤番（文化武鑑文化13年版による，50俵3人扶持），文化14年御徒目付（百俵5人扶持），文政8年5月19日学問所勤番組頭（御目見以上，150俵高），文政11年書物奉行。（「国書人名辞典」）

「寛政重修諸家譜」「新編武蔵風土記稿」編纂にも関わる（福井（1983））。

森銚三（1971）に「勝田半斎の詩中八友歌」の稿がある。また，森潤三郎（1933）の「紅葉山文庫と書物奉行」に評伝がある。

(13) 金子半五郎勝久 享和3年乙科及第 藤堂近江守組御徒

「寛政重修諸家譜」編纂に参画。「続徳川実紀」天保9年11月に，「天守番金子半五郎老免して褒銀あり」と記されている。

5 文人たち

幕臣としては無名だが，詩人・歌人・文人として名を残した者も多い。大田直次郎（南畝・蜀山人）をはじめ，この時期の江戸文人の中核的メンバーが，この御家人の及第者である。吉見儀助（紀定丸），新築郷右衛門（閑叟），勝田弥十郎（半斎），鈴木文五郎（椿亭，猶人），志賀鍋太郎（理斎），小島源蔵（蕉園）等である。学問所儒者の古賀精里，侗庵，勤番組頭の鈴木白藤なども含めれば，当時の文人たちの交流関係が明らかになる。やや時代を下れば，野村篁園（兵蔵，儒者），友野震舟（雄助，儒者），乙骨耐軒などが中核となっていく。

「その世代は幕藩体制の再確立を意識的に進めた寛政期の延長と，崩壊の度合を思想的行動的に早めた嘉永期以降の，両世代の谷間に喘ぐ天保期であった。そして侗庵に薫染されたこの時期の知識人を幕臣（旗本御家人）に照準すれば昌平校の教官に代表される。教官は正確に「学問所出役」と称し，身分は教則に「凡出役ト称スルハ其家格外ノ職務ニ従事スルモノニシテ，譬バ拜謁以上大御番・新御番・小十人組，拜謁以下御徒・与力等其家格常職ニシテ，家格相当ノ出役ヲナ

ス学問所教授方ニ挙ゲラルル類」(日本教育史資料)と附記する如く下級の武士である。彼等は例外なく昌平校に学んで教官に進み、ゼミナールともいうべき「詩会」に参加した。これはむしろ儒官・教官・学生を擁した官学派の「結社」と断言してもいい。」(坂口(1983))

学問所出役などにもならなかった、いわば純粹の文人として名を残している者として、次の3名が挙げられる。

(14) 横田順蔵 享和3年甲科及第 明屋敷番伊賀之者

本姓高津，維(惟)孝，乾山。

安永3(1774)年生，文政12(1829)年歿，56歳。

加古川遜齋に学び，及第したが，仕官先がなく，隠棲した。(「国書人名辞典」)

(15) 福原敬蔵 享和3年乙科及第 火消役一柳献吉組与力

安永6(1777)年生，文化3(1806)年歿，30歳。(「国書人名辞典」)

灑水，就道。寛政12年6月6日二階稽古之儀相願，8月18日押山保次郎，松田直蔵「卜三人一所」(「学問所日記」)。

古賀精里の弟子，火消組与力福原就寿の長男，植木八三郎の兄。

(16) 植木八三郎 文化3年甲科及第 大御番巨勢日向守組与力彦右衛門養子

天明元(1781)年生，天保10(1839)年歿，59歳。

初め福原氏，福原敬蔵の弟，植木氏に養子，玉厓，半可山人，晃。(「国書人名辞典」)

漢詩，狂詩作者として，著書多数。森銚三(1970)に「半可山人植木玉厓」の稿がある。それによれば，「文化12年には大御番与力となって居り，その年暮春二条城在番となって上京した。」

6 その他

(17) 鈴木文五郎 寛政6年乙科及第 神尾市左衛門組御徒(大田直次郎と同じ)

文(分)左衛門，忠恕，椿亭，猶人。

明和2(1765)年生，文政12(1829)年歿，65歳。

御徒目付，植木八三郎の牛門詩社の同人，文化8年朝鮮通信使来聘に際し，古賀精里に従って対馬に赴く。(「国書人名辞典」)

「江戸幕臣人名事典」では，鈴木分左衛門の記事の中に，「父鈴木分左衛門死御徒目付」となっている。子の方の分左衛門は，安政4年御裏御門御切手番之頭として「永々」御目見以上となっている。その後，安政5年には，天璋院の御広敷之番頭を務めている。(小川(2006)参照)

(18) 大斧幸之丞 寛政6年乙科及第 御中間幸右衛門倅

寛政7年8月升堂。紹介浜野乙吉，御掃除頭大斧幸右衛門嫡子。

(19) 志賀鍋太郎 寛政9年乙科及第 小普請組阿部大学組，伊賀之者

理助，忍，理齋。

宝曆12（1762）年生，天保11（1840）年歿，79歳。

長崎奉行所筆吏，文政年間江戸城奥詰めの吏，天保3年金奉行（御目見以上）。『続徳川実紀』
天保11年7月に，「金奉行志賀理助老免して小普請となり褒金を下さる」と記されている。

狂歌作者 著書多数。（『国書人名辞典』）

『江戸幕臣人名事典』では，理助の惣領は再び鍋太郎で，小十人となっている。孫の元三郎は，
安政6（1859）年部屋住で，小十人組へ番入りしている。

一方，鍋太郎惣領志賀元三郎篤は，嘉永6（1853）年に完成した『通航一覧』の編纂に関わっ
ている。小十人宮崎次郎大夫（成身）組である（福井（1983））。時間の前後が合わない。

また，森銚三（1992）の『広重の剃髪』では，理助の子は，宮川政運，画家の柳川重信，末子
の原徳齋と記されている。いずれも養子と考えられる。

(20) 饗庭仙太郎 寛政12年乙科及第 西丸御書院番頭巨勢日向守組与力

寛政11年8月升堂。佐藤捨蔵（一齋）口入（紹介）。文政6年正月11日御天守番佐藤茂兵衛組
仙太郎倅饗庭正太郎二階通稽古相願（学問所日記）。

(21) 松本直右衛門 寛政12年乙科及第 石河惣左衛門組御徒

『江戸幕臣人名事典』によれば，松本正之助の項に，「父直右衛門死御徒与頭」と記されている。

(22) 小島源蔵 寛政12年乙科及第 小普請組戸田中務支配源之丞倅 右衛門督右筆

小島蕉園（源一）。親は小島源之助である。別名唐衣橘洲（著名な狂歌作者）。

森銚三（1971）に『小島蕉園』の稿がある。それによると，寛政12年30歳。文化2年7月35
歳から文化4年12月まで，甲州田中の代官（御目見以上）。文化6年5月小普請として，その後
町医者。文政6年53歳から4年，一橋領遠州波津の代官，任地において，文政9年正月19日歿
す，56歳。

(23) 鈴木三郎次郎 寛政12年乙科及第 小普請組関半之丞弟

寛政12年5月2日，7日，18日，6月2日，7月20日，11月6日（素読手伝），12月24日（銀
子），享和元年正月14日，3月10日，4月11日，6月25日，7月20日に記事がある（『学問所
日記』）。この間御目見以下の取締役に任じられていたようである。

(24) 萩野八百吉 享和3年甲科及第 松平縫殿助組御徒

文政11年富士見御宝蔵番。

(25) 鈴木榮蔵 享和3年乙科及第 御作事下奉行八兵衛忒

その後父八兵衛は文化5年御金奉行となっている。「日本教育史資料七巻」(521頁)では、これにより、御目見以上となる。榮蔵は文政12年小十人組番入り(橋本(1993)95頁)。「学問所日記」に頻出する。

設楽八三郎(能潜)の実兄と思われる。八三郎は文政元年乙科及第、その時点で材木金奉行八兵衛次男であり、その後設楽家に養子。勘定吟味役海防掛や学問所御用を務めている。

「江戸幕臣人名事典」では、鈴木桓四郎について、「祖父鈴木八兵衛死御金奉行——父鈴木八兵衛死西丸小十人」と記されている。「父」のほうの八兵衛が、鈴木榮蔵と考えられる。

(26) 日根野文三郎 文化3年甲科及第 清水奥向勤方織之丞弟

「日本教育史資料 七巻」によれば、文化6年病気のため、(学問所)御目見以下取締役を辞任している。「学問所日記」文化6年7月10日では、「御目見以下寄宿世話役」となっている。

(27) 福井久七郎 文化3年乙科及第 小普請組逸見左近組

文化4年本丸表火の番。文化10年御徒押。嘉永元(1848)年正月15日御掃除頭福井久七郎とある(「学問所日記」)。

(28) 小林鉄之助 文化3年乙科及第 御先手依田平左衛門組与力勝蔵忒

寛政11年6月升堂。佐藤捨蔵口入、御先手屋代求馬組与力忒。天保14年では、御留守居番高井主水組与力。

「江戸幕臣人名事典」では、小林熊次郎について、「祖父小林鉄之助死、父小林邦太郎死」と記されている。熊次郎は、父の死後、文久元年に小普請より小十人へ番入りしている。

(29) 中里三次 文化3年乙科及第 御先手荒尾但馬守組与力

前述のエトロフ島事件の後、文化4年7月「江戸より鉄砲鍛錬の者を遣はさる。その人々」「13人、7月23日箱館に至りぬ。」の中に、御先手荒尾但馬守組与力中里三次の名が見える。(「休明光記」)

学問所地誌調所において、多くの編纂に当たった中里新十郎仲舒と同一人物ではないだろうか？ これは、推測に基づく疑問である。^{#3}

第4節 旗本への昇進

寛政一文化の五回の学問吟味で及第となった御家人46名について、その後の経歴をいくつかの資料で探ってみた。今回掲載したのは、そのうち29名である。まだまだ不十分であり、他にも資料は見つかるはずである。とりあえずの中間報告とお考えいただきたい。中には、「おもき追放」処分を受けた児玉嘉内、30歳で歿した福原敬蔵など不幸な道をたどった者もいる。

一方、御家人から旗本に昇進したのは、井上作左衛門（寛政6年乙科及第）、吉見儀助（寛政9年乙科及第）、中神順次（寛政6年乙科及第）、勝田弥十郎（享和3年乙科及第）、志賀鍋太郎（寛政9年乙科及第）、小島源蔵（寛政12年乙科及第）とみられる。その他に鈴木榮蔵（享和3年乙科及第）は、父八兵衛が旗本になった後に番入りしている。本人に起因して旗本に昇進したのは、少なくとも6名である。他にも資料がないため、確認できていない者がいる可能性もある。29名中6名が旗本に昇進したことは、「軽輩の励み」となっただろうか。旗本惣領がほとんど番入りしたことと比べると少ないかもしれない。この判断は保留としたい。

このうち、井上作左衛門、中神順次の2名は、寛政6年及第という時期からみて、昌平坂学問所で学んだのではない、と考えられる。また、吉見儀助、志賀鍋太郎、小島源蔵も、寛政9年・12年及第という時期から見て明確ではない。

そもそも御家人から旗本への昇進全般はどうなっていたのだろうか。このことについては、「寛政重修諸家譜」に基づく小川（2006）の詳細な研究がなされている。例えば「「家格令」発足の寛政4年から「寛政譜」寛政10年末までに、従来の旗本役に69家が就いた。7年間で年平均9家余である。」と記されている。この昇進度合いと比較して、今回対象の昇進者が多いと言えるかどうか、明確ではない。

旗本への昇進だけではなく、該当する御家人に勘定や学問所等での活躍の場が拡大したことは確かであろう。逆に言えば、活躍したからこそ、これだけの資料が残されているのではないだろうか。大田直次郎をはじめとして、飯田直次郎、中神悌三郎、金子半五郎、鈴木文五郎などの活躍である。そこまで含めれば「軽輩の励み」となっていたのではないか。

最後に、本稿の基本的な論点について言えば、御家人の、寛政一文化の時期の昌平坂学問所での学習、学問吟味受験へのモチベーションとして、及第後の登用が明確になっていたのかどうか、ここまでの調査では、結論を出しえない。

結局、本稿の分析では、当初の論点について、明確な結果を出しえなかった。これは、資料の調査がまだ不十分なことにもよると考えられる。また、多人数を調査するという方法だけではなく、個別の事例を深く分析する方法も考えられる。今後の研究課題としていきたい。

第5節 おわりに

幕府は、御家人も含めて幕臣全員を学問吟味受験者の対象とした。養子や御家人株の売買とい

うことも考えると、対象はもっと広い。

及第した御家人の登用は、幕末に近づくほど、より明確化した。例えば、文政6年乙科及第の鳥羽彦四郎は、乙骨家に養子に入り、学問所出役を経て、甲府学問所徴典館学頭を務めた乙骨耐軒である。嘉永6年乙科及第の同心武兵衛倅中村釧太郎は、後に儒者に登用され、維新後「西国立志編」を訳した中村敬輔（敬字、正直）である。

さらに、「昌平学科名録」の注記を見れば、文政以降の御家人の及第者の一部について、その後の経歴が示されている。

木村金平（天保4年甲科、儒者）、小林榮太郎（天保4年乙科、小十人番入り、奥儒者）、森田岡太郎（天保9年甲科、代官・勘定組頭、新見使節団で渡米）、加藤餘三郎（餘十郎、天保14年乙科、勘定組頭、代官、勘定奉行並、丹後守）、田辺太一（弘化5年甲科、外国奉行支配組頭、訪欧使節団）など枚挙に暇がない。

このように、「軽輩の励み」を包含した能力主義人事登用制度が、その後の日本の社会構造に対して与えた影響は大きいと、筆者は考えている。維新後の四民平等を経て、立身出世をめざして、帝国大学に武士だけでなく、農民・職人・商人の子弟が入学し、能力によって評価されるようになった。あるいは、明治企業勃興の主体として、下級武士・農民・漁民・職人・零細商人が果敢に事業創造に挑む。その「軽輩の励み」の土台は、江戸時代に形成されていたのではないだろうか。

注：

注1：明記されている資料以外に、「東京市史稿」（東京大学史料編纂所「近世編年データベース」による）、「大武鑑」、「文化武鑑」、「文政武鑑」、「江戸幕臣人名事典」、「江戸幕府旗本人名事典」、「寛政譜以降旗本家百科事典」などを参照した。先行の業績に大いに敬意を払うものである。

注2：新楽閑叟については藤田（2005）、眞壁（2007）など参照。

注3：中里新十郎については「国書人名辞典」、「藤岡屋日記」、福井（1983）など参照。

参考文献：

- 石井 耕（2009）『企業行動論 第2版』（八千代出版）
石川 謙（1960）『日本学校史の研究』（日本図書センター、1977年復刊）
石川忠久（1998）「序」『昌平坂学問所日記Ⅰ』（財団法人斯文会）
磯田道史（2002）「幕末維新期の藩校教育と人材登用——鳥取藩を事例として——」『史学（慶應義塾大学）』第71巻第2・3号
小川恭一（2003）『江戸の旗本事典』（講談社文庫）
小川恭一（2006）『徳川幕府の昇進制度——寛政十年末旗本昇進表——』（岩田書院）
笠谷和比古（1993）『士の思想 日本型組織・強さの構造』（日本経済新聞社）
笠谷和比古（2005）『武士道と日本型能力主義』（新潮社）
熊倉功夫（1976）「化政文化の前提——寛政改革をめぐって——」林屋辰三郎編『化政文化の研究』（岩波書店）

- 坂口筑母(1983)「天保下級武士 幕府昌平校 詩人と生活思想——「慷慨」「学問」「自由」への帰結——」『季刊日本思想史』第21号
- 高橋章則(1989)「近世後期の歴史学と林述斎」『日本思想史研究』21号
- 玉林晴朗(1944)『蜀山人の研究』(東京堂出版 1996年4月復刊)
- 辻本雅史(1988)「十八世紀後半期儒学の再検討 折衷学・正学派朱子学をめぐる」『思想』766号
- 辻本雅史(1990)『近世教育思想史の研究 日本における「公教育」思想の源流』(思文閣出版)
- 辻本雅史(2002)「幕府の教育政策と民衆」辻本雅史・沖田行司編『教育社会史 新体系日本史16』(山川出版社)
- 橋本昭彦(1993)『江戸幕府試験制度史の研究』(風間書房)
- 橋本昭彦(1994)「幕府直轄学校と藩邸内学校」『東京都教育史 通史編一』
- 橋本昭彦(2003)「第三章 官学への転換期における林家塾昌平校の実態」生馬寛信編『幕末維新时期漢学塾の研究』(溪水社)
- 橋本昭彦(2004)「近世武士階級のライフコースにおける学習の重み——研究ノート——」高木靖文編『近世日本における生涯教育システムの成立と発展に関する全体論的研究 I』(幕末維新时期学校研究会)
- 橋本昭彦(2005)「江戸時代の武士にとっての学習経歴の重みについて——幕臣の次男三男等の事例から——」高木靖文編『近世日本における生涯教育システムの成立と発展に関する全体論的研究』(幕末維新时期学校研究会)
- 馬場憲一(1975)「勘定奉行・勘定吟味役の昇進過程に関する一考察」『法政史学』第27号
- 福井 保(1980)『内閣文庫書誌の研究 日本書誌学大系12』(青裳堂書店)
- 福井 保(1983)『江戸幕府編纂物解説編』(雄松堂出版)
- 福井 保(1985)『江戸幕府刊行物』(雄松堂出版)
- 藤田 覚(1992)『遠山金四郎の時代』(校倉書房)
- 藤田 覚(2005)『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会)
- 眞壁 仁(2007)『徳川後期の学問と政治』(名古屋大学出版会)
- 森潤三郎(1933)『紅葉山文庫と書物奉行』(臨川書店, 1978年複製版)
- 森 銚三(1970)「半可山人植木玉厓」『森銚三著作集 第一巻』(中央公論社, 以下, 原文の著作年ではなく, 著作集の発行年で示す)
- 森 銚三(1971)「小島蕉園」『森銚三著作集 第八巻』
- 森 銚三(1971)「勝田半齋の詩中八友歌」『森銚三著作集 第八巻』
- 森 銚三(1992)「紀定丸」『森銚三著作集 続編第一巻』(中央公論社)
- 森 銚三(1992)「広重の剃髪」『森銚三著作集 続編第二巻』(中央公論社)
- 山本博文(2005)「幕府の昇進試験「学問吟味」の始まり」遠山美都男・関 幸彦・山本博文『人事の日本史』(毎日新聞社, その後新潮文庫)

以下の文献は, 著者名と書名の順序が混在している。

- 市古貞次他編『国書人名辞典』(岩波書店)
- 大久保利謙編集 江戸旧事采访会編(1980)『江戸 第二巻 幕政編(二)』(立体社)
- 大田直次郎「科場窓稿」『蜀山人全集 第二巻』(日本図書センター, 1979年10月)
- 小川恭一編(1989)『江戸幕府旗本人名事典』(原書房)
- 小川恭一編(1998)『寛政譜以降旗本家百科事典』(東洋書林)
- 『寛政重修諸家譜』(続群書類完成会)
- 熊井 保・大賀妙子編(1989)『江戸幕臣人名事典』(新人物往来社)
- 『升堂記 東京大学史料編纂所蔵 翻刻ならびに索引』(関山邦宏発行, 1997年3月)
- 『升堂記 東京都立中央図書館河田文庫本 翻刻ならびに索引』(関山邦宏発行, 1998年3月)
- 『続徳川実紀』黒板勝美 国史大系編修会『国史大系』(吉川弘文館)

『東京市史稿 市街篇』(臨川書店, 復刻版)

『日本教育史資料第七卷』(文部省編, 1980年臨川書店複製版第2刷)

橋本昭彦 財団法人斯文会編 (1998, 2002, 2006) 『昌平坂學問所日記 I—III』(財団法人斯文会)

橋本 博編 『大武鑑』(名著刊行会)

羽太正養(1807, 文化4年) 『休明光記』 『北方未公開古文書集成 第四卷』(叢文社, 1978年6月発行)

平田篤胤(1811, 文化8年) 『千島の白浪』 『北方史史料集成 第五卷』(北海道出版企画センター, 1994年11月発行)

『藤岡屋日記』(三一書房)

『文化武鑑』(石井良助監修, 柏書房)

『文政武鑑』(石井良助監修, 柏書房)

松崎慊堂 『慊堂日曆6卷』(山田琢訳注, 東洋文庫, 平凡社, 1983年4月)

宮崎成身 『視聽草』 福井保解題 『内閣文庫所藏史籍叢刊 特刊第二』(汲古書院, 1986年4月)

『柳宮補任』 東京大学史料編纂所 『大日本近世史料』(東京大学出版会)